

第2回・1980年1月16日の講義 (pp.25-52)  
生者たちの統治 コレージュ・ド・フランス講義 1979-1980年度

2022/10/18

K原

<全体の概要メモ>

1. 統治と真理の諸関係の問題について概説したのが前回の講義だった。権力の行使は、真理を現出させないと果たされえない。自分が従う権力の正当化（真理の現出化）が必要、それをしないと権力の行使はできない。
2. この権力行使と真理の関係について、わかりやすく示されているのがギリシア悲劇の一つである『オイディプス王』である。ギリシア悲劇は、みんなアレテュルジーだが、中でもこの戯曲は、権力がテーマとなっていて、権力行使と真理の諸関係が、この作品で示されている。だから『オイディプス王』について見ていく。
3. 真理の現出には、オルトン・エポス(従わなければならない正しい言葉)の表明がある。例え事実が全て語られたとしてもそれのみでは不十分で、それが実際に目に見えるものになり、嵌まりあって、初めてオルトン・エポスとなる(=真理が現出する)。
4. 戯曲『オイディプス王』の真理の手続きには、半分の法則が見られる(ある断片と、それに合うもう片方の断片がある=シュンボロンの働きがある)。神的・予言的半分と、人間的半分(オイディプスとイオカステの半分、そしてコリントスの使者とテーバイの羊飼いの半分) これらを嵌め合わせたとしても、結局ライオスを殺したのが1人か複数かわからないし、テーバイの奴隷が受け取った子どもがオイディプス王だったのか確証はなく、オイディプスがイオカステの息子なのかわからない。しかし、オイディプスは捨て子であり、実父のライオスを殺し、実の母であるイオカステと交わったということが、真理として現出した。それは、神的アレテュルジーによる語りと、奴隷のアレテュルジーによる証言、奴隷がその場に存在していたことによって、真理が実際に目に見えるものになった(=現出した)ため。
5. 神託による宗教的アレテュルジーは、奴隷のアレテュルジーがなければオルトン・エポスの表明にはならない。奴隷の、命令への不服従、虚偽、沈黙のおかげで、神の予言が実現した。神が正しかったことになった。奴隷のアレテュルジー、尋問の手続き、何を見たのか言うことを強要し、その場にいたこと、彼ら自身がその現場にいたこと、同じ人物たちが舞台上に登ること、奴隷たちの<真なることの語り>がなければ、神々の<真なることの語り>も宙に浮いたままだった。オルトン・エポスの表明には、奴隷たちの<真なることの語り>が必要だった。

●統治と真理の諸関係(続き) pp.25-

一例としての『オイディプス王』の悲劇 pp.25-

- 前回、統治と真理の諸関係の問題について概説した。権力の行使は、真理を現出させないと果たされえない。自分が従う権力の正当化(真理の現出化)が必要、それをしないと権力の行使はできない。  
※フーコーによれば、この真理の現出化という言葉は、統治術のようなものではない。功利性の組成に追加として加わるようなもの、追加として加わってくるような真理の現出化について、今日は強調したいとのこと。
- 他の悲劇もアレテュルジー(真理の儀礼的現出化)ではあるが、『オイディプス王』は権力の行使と真理の現出化の関係の問題をはっきり提起しているので、今日の講義では『オイディプス王』のアレテュルジー的読解を行う。

ギリシア悲劇とアレテュルジー pp.26-

- ギリシア悲劇のすべては真理の現出化の儀式（＝アレテュルジー）である。悲劇は真理を語るばかりではなく、<真なることの語り>を表現する＝真理が日の目をみるための方法を表現するひとつの方法となっている。
- 悲劇の本質的要素は2つある：逆転がある＋アナグノーリス（知らなかったことが発見される、わからなかったことが明らかになったりする）、これにより真理が現れ、隠されていたものが暴かれたりする。

#### オイディプスの王権の主題を中心とする戯曲の分析 pp.26-

- 他の悲劇とオイディプス王となりが違うのか？→権力と真理の現出化の関係を説明してくれる（わかりやすい）悲劇だから
- 悲劇一般同様、認知や真理を劇化したものであるが、それが悲劇そのものを動かしているので強力で根源的なアレテュルジーとなっている。（オイディプスが）知ろうとして真理の営みを行い、自分が探求の対象だったことを発見する。pp.27-8

さらにフーコーが強調したいのは、この悲劇で認知が実際になされる技法、真理の現出化の手続きであり、オイディプスの悲劇を貫いて働いている手続きはどのようなものか？というところらしい。

オイディプス王は王の物語、権力行使と真理の現出化の手続きの関係を説明してくれるんじゃないか？

#### 【『オイディプス王』登場人物】

- オイディプス：主人公
- ライオス：オイディプスの実の父
- イオカステ：オイディプスの母にして妻
- クレオン：テーバイの摂政。神託を聞きに行った人。
- テイレシアス：神なる占術師（予言者）。アポロンから、真理を語る権利を付与された人。
- コリントスの使者：昔羊飼いだっただ時代に、オイディプスをその手に委ねられる。
- アポロン：「父を殺し母と交わるだろう」という神託を与えた神
- コロス：解説者（？）合唱隊。
- ポリュボス王：捨て子だったオイディプスを拾った王。
- 奴隷：ライオス殺害の証人。昔、オイディプスを捨て去るよう委ねられた（結局せず）

#### 【『オイディプス王』超・あらすじ】

捨て子だったが、王に拾われ、自らも王となり権力者だったオイディプスが、真理・真実によって立場が一転していく（権力がなくなる）はなし

（※ 物語の詳細は、第1回・Mせんせいのレジュメをご覧ください）

#### ●オルトン・エポス、すなわち従わなければならない正しい言葉の表明の条件 pp.28-

#### 一連の半分の法則 pp.29-

『オイディプス王』では、真理が連鎖的に発見されていく。この連鎖は「半分の法則」に従っている。

[ある半分（疫病への対策方法）]

- テーバイに疫病が流行しているため、デルポイの神託を聞くためにクレオンが派遣される
- 神託は、疫病の流行を止めるための清めの儀式によって、前の王であるライオス殺害の穢れを清めることが必要だと語る  
→テーバイで流行している疫病を止めるための必要十分がここまでで語られる

[もう半分（疫病の原因）]

- なぜ疫病が引き起こされたのか、誰がライオスを殺したのか？  
→神託は答えたがらないので、もう半分は欠けている。じゃあ、どうやってこの半分を知ることか？
- オイディプスは「ライオスの殺害についてなんらかの情報を持っているすべての人間は、真理がついに現出し、神託のもう一つの半分、神託が語ることの隠された半分が明らかになるよう、報告しに来ること、そのことを私は布告する」しかしコロスは、いやその手続きはよくないと反論したので、↑の方法はなしということになり、占術師・予言者であるテイレシアスに聞こうということになった。

※テイレシアスはまさしくアポロンと等しく王であると言われており、アポロンとテイレシアスは対置されている。

- アポロンとテイレシアスは補いあう者同士でもある。アポロンの神託に欠けている半分以上をテイレシアスがもたらす。アポロン「これは殺害であり、それもライオスの殺害だ」テイレシアス「殺したのはお前だ」  
→これで半分以上が補い合い、事実が全て語られた（が、真理はまだ現出していない、真理全体を語ってはいない）。なにかが不十分だからまだ現出しない。

真理の手続きには神的・予言的の半分と人間的な半分がある pp.30-

- オイディプス王はテイレシアスを疑う。オイディプス「お前が俺に対してよからぬことを考えているからだ……それで俺の権力を攻撃しようとしているのだ」
- コロス長は、権力者（王）と占術師のどちら派かになることを拒む。コロス長「お二人とも腹立ちまぎれに語っておられる」だから二人のどちらの言葉も疑わしい。コロス「彼（テイレシアス）が正しいとも間違っているとも言えない」その理由として4つをあげている
  - 1) 自分は過去も未来も見えず、自分の現在しか見えないから
  - 2) 占術師は、過去についても未来についても証し（バサノー）を与えてくれないから
  - 3) 結局、テイレシアスも人の子だから、人間が発する真理の言説と同じような過ちや要求の支配下にある
  - 4) たしかに他の人より多くを知ることができる人間はいるかもしれないし、そのような能力を授かった人間が占術師なのだろう。しかし、オイディプスが過去にいくつかの証拠を示したのは間違いない。オイディプスはテーバイを救い、テーバイに対する愛情の証拠、利をもたらす能力についての証拠を示した  
→オイディプスの（権力の）証拠の存在は、占術師のより多くの知と釣り合っている。だから、コロスはどちらが上か判断するのを拒んでいる。

- 神の言葉と、今 目に見えているものに齟齬が発生している
  - 神の言葉（占術師テイレシアスの言葉）：「殺したのはお前だ」（＝テーバイに疫病をもたらしたライオスの殺害はオイディプスが行った）
  - 今見えているもの：テーバイを救ったオイディプス
- コロスの視線がこの齟齬を解決する。p.32
  - コロス「「私が見た」ときにこそ、「オルトン・エポスすなわち正しい言葉」があるだろう」
  - これから目に見えるものになって嵌まりあって初めて正しい言葉（オルトン・エポス）になるということは、神と占術師が全てを語っても、それだけでは真理全体を語ってはいない。
- オルトン・エポスが語られた時、そのときはこの言葉に従わなければならない。
  - なぜならそれが真理であり、真理にふさわしい起きてや束縛や義務なのだから。
  - 語られた事実（p.33の\*\*注だと「物語」）から、真理そのものへの移行が繰り返される

↑↑↑ここまでが真理の手続きの半分…神的、予言的で神託的な半分、占術的な半分↑↑↑  
 ↓↓↓ここからが真理の手続きのもう半分…人間的な半分↓↓↓pp.32-

#### ある半分

- イオカステは、オイディプスを安心させようとしてイオカステ自身の記憶を呼び起こし、それに基づき占術師（テイレシアス）の嘘を示そうとする「ライオス殿は三筋の道が合う場所で盗賊どもに殺されたのですから、あなたが殺したはずはありません」→（オイディプスによって救われた）テーバイの人々、オイディプス王の取り巻きの側から見られた、ライオスの殺人
- オイディプス イオカステの記憶と合わせて、自分も三筋の道の合うところで誰かを殺した（自分が行ったこと、自分の目で見たこと）→イオカステの半分とオイディプスの半分で全てが知られる  
 ただし、イオカステは盗賊によってライオスが殺されたという噂から↑のように判断している、が、オイディプスは自分が老いた王を殺したときに独りだったことをよく知っている…??? 何が正しいのか、証言者が捜索される

#### もう半分の人間的な半分

- 証言者であるコリントスの使者がやってきて、オイディプスが捨て子だったこと、この使者が、昔羊飼いだった時代に（ライオス王から捨てられたオイディプスを）その手に委ねられた張本人であることが明らかになる。
- さらに、テーバイの奴隷がやってくる「自分がオイディプスを引き渡し、イオカステの手から受け取った」奴隷はライオス殺害の証人であり、かつ昔両親が息子オイディプスを殺そうとしたときにオイディプスを託された者でもある。
  - コリントスの使者の目撃証言とテーバイの羊飼いの目撃証言により、神と占術師の神託が完成

#### まだわからないところ

- 結局、ライオスを殺したのは1人なのか複数なのか？
  - オイディプス王が本当にライオスを殺したのかわからないし、噂の盗賊がライオスを殺した、というのも本当なのかわからない。

## 2) 捨てられた子どもは誰なのか？

→テーバイの奴隷が受け取った子どもが本当にオイディプス王なのか確証がない。だから、オイディプスが本当にイオカステの息子なのかもわからない。

- 全てを知るイオカステは自殺してしまい、結局真相はわからないまま。知りうる全てを知ったとしても、結局わからないところ（ほつれ）は残るが…

### シュンボロンの働き

- ここまでで、神的な半分、宗教的・予言的・儀礼的アレテュルジー（アポロンの半分とテイレシアスの半分）と、人間的な半分、記憶や搜索による個人的アレテュルジーを伴った殺害という半分（イオカステの半分とオイディプスの半分/コリントスの使者によるオイディプスの誕生という半分とテーバイの奴隷の小屋の奥にある半分）についてみてきた。この6つのどれが欠けても正しい言葉は構成されない。
- ただし、6つで1つというよりは、相補的な断片が2つずつ結合し、そのそれぞれの段階で真理の全体と組みになっている。それぞれの段階で2人の人物の間にごく強い結びつきがある。
  - 最上層 神と占術師（アポロンとテイレシアス：神的）
  - 中間段階 夫と妻（オイディプス王とイオカステ：法的な関係）
  - 最下層 奴隷（ポリュボス王のコリントスの使者とテーバイの奴隷：友情の関係）
- シュンボロン：2つの半分が、この種の結合でつながる二人の人物の間で嵌め合わされるようなゲーム。嵌まりあうことで過去の出来事を認証し、2人の結合を確証してくれる（p.36 半分って言ってきたけど「ひとつの断片と合うようなかけらの断片」という表現もしている）  
→これって、神託のアレテュルジーと奴隷のアレテュルジーもシュンボロン（ある断片ともう1つの断片の関係）ということなのか？違うのか？（最後まで読んでふと思った）

### 神的なアレテュルジーと奴隷のアレテュルジーの比較 pp.38-

- オイディプスの奇怪な二重性pp.36-7 ←ここ何が言いたいのがよくわからない
- オイディプスは2つの半分であると同時に二重の存在である。母親の息子でもあり、夫でもある。自分の子どもの父でもあり、兄でもある。なにか言っているつもりだが、つねにそこに別の意味が滑り込んでくる→彼の言葉も全て二重  
（フーコーは）知という用語、知の儀礼と現出化という用語、すなわちアレテュルジーの用語で問いを立てたい。  
→最上層と最下層を比較することで、オイディプスの知がいかに特殊だったかを明確にできると考えた
- アレテュルジー、すなわち真理の儀式的で完全な表現は、2回はたされている。1回目は最上層、神々の段階（アポロンとテイレシアス）で、2回目は最下層、奴隷と召使の段階。オイディプスとイオカステ（中間段階）は、しらすらすのうちに最終的に真理を語っているが、彼らはアレテュルジーの真の担い手ではなく、単なる仲介者

### 神々のアレテュルジーと奴隷のアレテュルジーの比較 pp.37-

真理の審級、真理の保持者、問いかけを受ける真理の主体であることは共通しているが、（質問者の）問いと、（質問者の）問いかけの方法が異なっている。

#### 第1の違い 問いと問いかけの方法 pp.38-

- 神々の場合：人は神々におうかがいを立てる。答えが与えられるとそれは決定的で、あとはどうしようもない。神とのゲームは一回限り、勝負が終わったらその結果でなんとかしていくしかない。
- 占術師テイレシアスの場合：神と同様、おうかがいを立てられ、問いを投げかけられる人物ではあるが、彼は自らの意志で喜んで来たのではなく、せき立てられ、やっと答える。なぜなら、1) 彼は都市によいことが起きるように真を語ることが任務だったから。ポリスが不幸な時に黙っていたら、彼は自分の仕事を果たしていないことになる。だから、やっと彼は語った。さらに、2) テイレシアスははじめはアポロンと同じような王として現れるが、別の顔としてオイディプスその人に劣らない王として現れる。テイレシアスを問いただすの（問いかけの方法）は、主権者とテイレシアスの対応な論戦においてであり、権力から権力への、王から王への問いだから。
- 奴隷と召使の場合：神やテイレシアスへの問いの形式や手続きとは異なる。2人の召使の1人は使者であり、いくつかの知らせをもたらし、情報の提供を求められる。羊飼いは、神と対称的な位置を占め、テイレシアス以上に事態を知っており、アポロンと同じ程度に知っている（羊飼いはオイディプスを委ねられ、彼を殺せという命令に従わず、コリントスの人間の手に委ねるとともに、結局ライオスの殺害にも立ち会った全ての真理を保持する者）。彼らは、尋問や拷問といった手続きで、（オイディプスから）真理を抽出しようとさせられる。

#### 第2の違い 知の様態 視線と言説、見ることと語ることを合成する方法 pp.40-

- 神々の知の場合：神は実際にすべてのことを見る。なぜなら神自身が万物を照らす光であり、万物を見さしめる光だから。神の言葉がつねに真正であるのは、発話する力でありかつ宣言する力でもあるから。ある事柄を語るとともに、その事柄が生起するようにする。→真理を語らない、ということはない。絶対に謝りを犯さない。語る力と生起させしめる力との本性が同一である。
- 召使の場合(p.41)：見ることは、人間の遺志、王の決定、起きる出来事などによって外から課される光景を前に、無力な状態になること。召使たちは無力な観客としてしか存在していない。視線の真理の根拠は、彼らが現場にいたこと、彼ら自身の目で見、彼ら自身の手で行動したという事実が根拠となっている。召使たちの言うことに確証をもたらすのは、<ある場所にいたという法則>にすぎない。ある身分と地位を持った者として、この証言者こそが神の言葉を確認する。
- 神と占術師は、真理の力が彼らに宿っているので、そもそも現場にいる必要はない。でも、召使たちの場合は、真理の力は彼らには宿っていない。彼らはおのれの身分や地位の名の下に、そうした人物について真の言説を語るができる。

#### 第3の違い 時間に関するもの pp.43-

- 神々や占術師の<真なることの語り>：現在と未来という軸に位置し、つねに命令という形をとる・過去は振り返らない。彼らが語るのは現在-未来という軸上にある何かで、それが命令という形をとる。彼らのはつねに活用すべき打開策については語る。（例：穢れを排さなければならぬ（テ

ーバイで疫病が流行した時) )

- 奴隷たちの<真なることの語り>：完全に過去の軸の上にある。記憶という形でしか真を語ることはできない。

#### アレテュルジーの歴史的二形態、すなわち、神託による宗教的アレテュルジーと証言に基づく法的アレテュルジー pp.44-

それぞれのアレテュルジーを示すために使われる用語について

- 神託による宗教的アレテュルジーの場合…ペーミ：発話すると同時に宣言する。単なる「私は語る」ではなく「私は宣言する」「私は布告する」「私は宣告する」。行われること、起きることを命ずる。
- 証言に基づく法的アレテュルジーの場合…ホモロゲオー：告白し証言する。「私は認める」「私はまさにそれが起きたことを白状する、私は、起きた出来事の法にそむくことはできない」。  
→これは、アテネにおいて、前6世紀終わり～前5世紀初頭において法典や法律により整備された法的手続きの規則。法的なアレテュルジーは、捜査を可能にし、証人の召使や尋問、証人間の突き合わせなどを含む。奴隷に真理を語らせるために拷問する可能性や権利を含む。奴隷は、死と真理が釣り合っている唯一の存在だった。なにかがあって、そこに観客として存在していたという証言に基づく。  
→この2つの手続きによって古代ギリシアでは真理の現出化を正当化し、保証できるような諸規則に従って、それを引き起こす方法を規定していた。
- ↑は、クレオンとオイディプスの対立（戯曲の冒頭、前半部分）の場面で確認が可能。クレオンがオイディプスに「父を殺し、母と交わる」という神託を報告すると、オイディプスはクレオンに対して、王の地位を自分から奪おうと陰謀を計画したと責められる。結局、この対立は、イオカステが間に入り、クレオンに、神に誓って神の言葉をでっちあげたりテイレシアスと共謀したりしていません、と誓いを立てることで終結。これは捜査や尋問よりも古い形の法的な手続だった。
- 「このような手続きを、捜査や尋問という手続は押さえ込もうとしていた」 p.45  
→これってどういう意味？これがないと真理は現出しない、ということ？
- オイディプスとクレオンの紛争が収められる方法は、神々から奴隷に至る段階づけにおいて補足的で構造的な役割を演じている（神託は神々の真理の陳述、宣誓とは王や長の真理陳述、証言とはその他の者、彼らに仕えている者の真理陳述）。

#### 戯曲における両者の補完性 pp.45-7

- 神々の真理陳述と奴隷たちの真理陳述、神託のアレテュルジーと証言のアレテュルジーとの間にあ  
る、真に重大な緊張は、この2つがまったく同じことを述べているという事実由来している。
- 奴隷のアレテュルジーがなかったら、神々のアレテュルジーはありえたか？オルトン・エポス[正しい言葉]、真理の完全で不可避な現出となることができたか？…いや、ありえなかった、現出できなかつた。
- 神の予言の言葉が最後まで貫徹され、実際にオイディプス誕生の時に予言されていたことが真であり、また真となるためには、奴隷たちの虚偽が必要である。もしもイオカステが子どもだったオイ

ディプスを委ねた奴隷が命令に従っていたら、彼はオイディプスを殺していた。しかし奴隷は命令に従わなかった。奴隷はオイディプスを別の者に委ね、そのことを言わなかった。もうひとりの奴隷はオイディプスをコリントスに連れていき、ポリュボスに委ね、そのときも何も言わなかった。オイディプスが父母を殺さないようにコリントスを去ったときも何も言わなかった。

- 奴隷の、命令への不服従、虚偽、沈黙のおかげで、神の予言が実現した。真理のゲームがあったから、神が正しかったことになった。奴隷のアレテュルジー、尋問の手続き、何を見たのか言うことを強要し、その場にいたこと、彼ら自身がその現場にいたこと、同じ人物たちが舞台上に登ることが必要だった。
- 奴隷たちの<真なることの語り>がなければ、神々の<真なることの語り>も宙に浮いたままだった。奴隷たちの<真なることの語り>が必要だった。

オイディプスが父ライオスを殺し、実の母と交わったということは、あくまでも仮説に過ぎないが、しかしオルトン・エポスによって、神々の<真なることの語り>が、奴隷の<真なることの語り>によって、今日に見えるものとなり正当化される・真理として現出している。真は神々のアレテュルジー、偽は奴隷のアレテュルジーと言える？真とは偽によって生み出される…？

→全てあくまでも仮説に過ぎないのに、それが正当化され、真理となる。このようにして、仮説は「真理」となる、真理が形作られる。